
ぼくらはたしかに空にいた

ねこたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらはたしかに空にいた

【Nコード】

N8833I

【作者名】

ねこたん

【あらすじ】

1939年、アドルフ・ヒトラー率いるナチスドイツ帝国は第二次世界大戦を勃発させる。イギリスの若きエース、キャットや義勇兵のリー、ドイツ空軍最強の女爆撃手ユーリ、イタリアエースのドウラン、ドイツの空の狼ことハルトマン。空で生きる若者達が、愛機とともに舞い上がった時、物語は動き出す。戦争という愚かな枠の中で踊らされる青年達の物語。

1・飛行場（前書き）

最初に書いておきますが・・・

この小説に出てくる人物、国家、団体などは実際には存在するものとは関係ありません。フィクションです。

1・飛行場

風はいい。すべてを忘れるには本当に丁度いい。

とくに、今日のような憂鬱な日は風に想いをはせるのは、心地よい。ロンドン近郊にある、イギリス空軍の飛行場にて1人の少年が真上に広がる大空を見上げて、ため息をつく。

滑走路には2種類の戦闘機があまたあり、また多くの整備兵たちがレンチやバールを片手にその飛行機達を整備するのにいそしんでいる。

数多く並ぶ戦闘機たち。名をば、スーパーマリンスピットファイヤとホーカーハリケーンという、後にイギリスを代表する戦闘機となる名機たちである。2種類とも、プロペラがついたエンジンから伸びる胴体がほっそりとしているのが特徴的で、違いと言えば、スピットファイヤは翼が薄く、楕円状だえんじょうになっている。また、ハリケーンは翼は長く、そこには重装備をつけている。スピットファイヤは機動性やスピードを重視した機体で、逆にハリケーンは重装備により攻撃力を高めたものなのだ。

そんな2種類の機体は、急遽イギリス首都、ロンドンの郊外の空軍飛行場に収集された。その数は約100機。(ハリケーン60機、スピットファイヤ40機)

収集されたのは戦闘機だけではない、戦闘機に乗る飛行士も収集された。この時期、イギリスで飛行士を収集するのは大変なことであり、戦闘機に乗れる飛行士は、現在のイギリスには本当に少なかった。そのため、集められた飛行士の中には田舎の農民出身の男や少し前まで立ち並ぶ商店の一角で商売をしていた中年男性、アメリカから義勇軍としてやってきた青年もいる。

イギリス中から収集された飛行士たちは、それぞれの愛機を整備するのを手伝い、整備兵不足のため、飛行士自ら機銃や機関砲の弾を運んだり、または弾をこめたりしている。

そんな中、その少年はまたため息をつく。
不穏な風があたりを通り過ぎる。

さきほどまで澄み渡っていた空は少しずつ黒色の雲に飲まれ始めた。
「こりゃー雨になりますぜ？」

少年の愛機であるスピットファイヤーをいじっている整備兵が話しかけてきた。やせた体に薄青色の整備服をはおり、オイル汚れがしみこんだ軍手をはめている。突き出た歯が特徴的な男だった。

「いいじゃないか。ロンドンが燃えたとき、雨が消してくれる。」
「雨で消せるほどの火だといいんですがねえ」

少々、苦笑しながら整備兵は少年の愛機のエンジンについているオイルパイプを掃除し始めた。

「まったく、なんでこうなるかね？」

もくもくとオイルパイプをブラシで掃除する整備兵に少年は言った。
「そりゃー時代が時代ですからねえ、あんたも可哀想に、時代のせいでそんな若くから戦争に駆りだされるなんてね」

整備兵はエンジンのオイルパイプをバイパスし、少年は主翼にある20mm機関砲に弾薬をつめる。

「だがねえーあなたには感謝してるんだぜ。あんたの愛機の整備は本当に手間がかからない。なんとってほとんど被弾することがないからね。」

突き出た歯を出して笑う整備兵に少年はまたため息をつく。

「ぼくが被弾しないおかげで、憎くも無い、顔も知らないドイツ兵が空で命を落とすんですよ？」

そう言われ、整備兵が少し押し黙る。突き出た歯で唇をかむ。
「しかたないですよ。戦争なんですから。」

整備兵は呟いた。整備兵にも、少年にも、なぜ戦争が起こったのかわからない。だが、イギリスはドイツに屈服することを良しとはしなかった。たとへ毎日のような大空襲がイギリス本土に押しかけ、幾多の工場や基地を破壊しようと決して屈服はしなかった。

少年は20mm機関砲から12.7mm機銃の弾込めに移る。今

から人を殺すために込められる機銃弾はどこかあやしげであった。敵機に無数に穴を開け、エンジンを破壊し、機体を爆破するだろう。そして、またそれと同じように敵の弾丸が愛機に当たれば、少年もまた落ちていく。オイルや破片を無様に撒き散らしながら彼は愛機を棺おけにして死ぬ。死はすぐ隣にいた。

「イギリスはドイツに勝てると思うかい？」

少年は整備兵に聞いた。着陸用の車輪の接続部分を固定しながら整備兵は少し考えてから答えた。

「勝つても負けてもいいから、あんさんはココに戻ってくるんでっせ。そしてらまたあんさんの機体を整備できるしね」

整備兵は言った。少年はまたため息をつく。

「大丈夫。あんさんは、フランス航空戦でも、ダンケルク撤退作戦でも活躍したし、ほとんど被弾しなかつたんや」

「ああ……」

少年は戦争を知った。大好きな大空を、大好きな愛機が、大嫌いな人殺しを行う、みるにたえない残虐な行為。澄み渡った、青い空も爆炎や煙色に塗りつぶされる。

後に第二次世界大戦と呼ばれることとなる史上最大の戦争。第一次欧州大戦に敗北したドイツはベルサイユ条約により多額の賠償金を押し付けられ、財政はボロボロであった。そこへアメリカが端を発した世界大恐慌によりボロボロのドイツ財政は壊滅的な打撃を受け、街には失業者が増え、パンを買えない国民は飢えに苦しみ、ドイツは消滅の道を歩み始めていた。そこへナチス党（国家社会主義ドイツ労働者党）の指導者、アドルフ・ヒトラーにより全体主義を貫いた独裁政権を発足。

また、イタリア王国では、ファシスト党党首、ベニート・ムッソリーニによって独裁体制が敷かれており、同じ全体主義のドイツと強い結びつきを持った。

その後、ヒトラーの政権下でベルサイユ条約を破棄したドイツは、再軍備を開始。またユダヤ人資本家から大量の資金を借り入れ、公

共事業を起こし失業者を吸収した。たった数年で軍事国家となったドイツは強大な軍事力を背景にポーランド、ノルウェー、デンマーク、オランダに宣戦しことごとく占領。その後、フランスへ侵攻しわずか1ヶ月でフランスを占領。フランス沿岸にあるダンケルクにイギリス、フランス連合軍を追い詰めた。イギリスは国中から集めた艦船によつてなんとか救出に成功した。

この少年はドイツのポーランド進行やフランス航空戦、ダンケルク撤退作戦の時も出撃している。敵に撃墜されたことは皆無。その代わりに、多くの敵を撃墜している。戦闘機56機、爆撃機27機、その他4機。若くして少年はイギリス最強のエースだった。また、彼が弾を込めている愛機、スピットファイヤも彼とともに大空を舞つてきた相棒だった。

短髪でも長髪でもない金色の髪に、それなりに整った顔、飛行士用の軍服を纏った体はがっしりとはしているが、痩せており、とても最強の戦闘機の前には見えない。

「あんさん、これ塗りなおしときまずぜ」

塗装スプレーを片手に整備兵が言う。その先には愛機の機首があり、戦いの後で汚れ、剥がれ落ちそうなマークがしるされていた。真っ黒な猫が、喧嘩するときのように毛を逆立てて突っ張っている様子を絵にしたものであった。自分の縄張りを荒らす他者をしりぞけんとする野生の戦いを、簡潔なマークで描いていた。そこへまた真新しい塗料が塗られていく。剥げ落ちそうになっていたマークの上に新しい塗装液が塗られ、新品同様になる愛機のマークを眺めて少年はすこし口元を緩ませた。

イギリス国民はイギリスを守り抜く強い意志を示すイギリスの首相、ウィンストン・チャーチルを平和の番犬と呼んでいた。どんなにドイツが圧倒的でも決して抵抗をやめなかつたからだ。

この少年は政治的にイギリスを守るチャーチルに対し、迫り来るドイツ空軍からイギリスを守る縄張りのボス猫と呼ばれ、連日の空襲で苦しむイギリス国民に希望を抱かせていた。機首に描いてある

マークも、そのあだ名の由来の一つだが、それ以上に彼の名前が猫を深く連想させるのだろう。

「これで、ロンドン上空はあんさん…キヤット・b・リトルの縄張りやて、敵さんも思い知るやる？」

整備兵はイギリス最強のエースの名を言った。

それに対してイギリス最強のエースはまたため息をつく。

毎日のようにロンドンを爆撃に来る、ドイツ空軍を迎撃すべく集められた100機の機体。そして100人のパイロット達。そして、彼らの愛機を世話する200人近い整備兵達。お偉いさんの戦争の駒として彼らは動く。

キヤット・B・リトル。たった19歳の青年エースもそんな駒の一つとして、一切の虚無や汚らしい欲望がないどこまでも真っ青な空へと愛機とともに飛び立っていくことになる。

例えこの戦争が永遠に続こうとも、この運命は変わらない。

1・飛行場（後書き）

どうも^^^

ぼた空を読んでくれた方ありがとうございます^^
今回は戦争ものです。

なんか続きが大変そう

コメントお待ちします。

2 飲んでいいのか？19歳！（前書き）

2 話ですw

2・飲んでいいのか？19歳！

世界最大最強の帝国として栄華を誇った、大英帝国の心臓都市。

すこし前の時代ならそう呼ばれていた。また、そう呼ばれていても不自然ではなかった。

しかし今は違う。

たしかに事実上、多大な植民地は持っている。

しかし、旧時代とは決定的に違うことがある。

イギリスは陸の孤島であった。ほんの1年でヒトラー政権のナチスドイツ帝国とムッソリーニ政権のイタリア王国は欧州の大部分を支配した。当然、敵であるイギリスは海上を封鎖され、イギリスは孤立した。

ドイツやイタリアはイギリスがすぐ降伏すると思っていたのだろう。だが、そうは物事が運ばなかった。

イギリスは降伏を断固拒否。怒ったドイツ軍は連日連夜、大爆撃航空隊をイギリスに送り込んで、イギリス軍の基地、倉庫、飛行機、艦船などを爆撃し、敵の戦力を十分にそぎ落とす作戦に出る。

またしてもイギリスは断固抵抗した。

そのために、戦況は泥沼化し、ドイツ空軍の攻撃も都市を破壊し国民の士気を落とすための無差別爆撃へと切り替わっていった。首都であるロンドンは無差別爆撃の嵐から逃れることなど不可能で、連日連夜の大空襲。昼は戦闘機で迎撃が可能だが、夜となると難しく、被害は大きかった。

だが、めずらしいこともあるものだ。今日は昼間爆撃がなかったのである。おかげで今日は迎撃に出動しなくてよかった。昼間、あんなにも整備兵と生きるか死ぬかについて話し合ったというのに、19歳のパイロットはどこか気が抜けていた。

「こう、毎日毎日爆撃するなんていう単純な作業に飽きたんじゃないのか？ドイツ軍も」

ロンドン郊外にあった、第9防空戦隊特設滑走路から、今日の職務を終えて帰宅するキヤットは、本日同部隊に義勇兵として配属されたアメリカ人のドウモ・リー・リョルガ（これより後にはリーと書く）とともにロンドンの町へ路面電車を使い移動していた。連日の空襲は激しく、迎撃も十分ではないため町にはところどころ半壊したビルや、えぐったように穴の開いた道路が生々しく残っていたり、空襲時の迎撃戦で墜落した飛行機が敵味方関係なく、落ちていた。飛行機の残骸は空戦の激しさを物語っており、翼には無数の穴が開き、プロペラはへし折れ、機体の骨格部分が露骨に表されていたりする。また、爆弾によって燃えてしまった物も多いらしく、火薬の二オイが立ち込めている。

通常なら昼と夜の2度空襲があるのだが、今日は昼の爆撃がお休みだったようだ。最近はいギリス空軍も激しい抵抗を見せており、昼間爆撃は被害が大きすぎるため、ドイツは夜間爆撃だけに攻撃を絞ったのではないだろうか？というのが、イギリス作戦司令部の見方でもあった。

「飽きられたんならいいんですけどね。」

丁寧にキヤットに返答するリー。

「いいことだよ。いい日だ。出撃しない日ってことは、人を殺さずにすむ日ってことだろ？」

「それもそうですね、それに殺されずにすむ日でもありますし。」

キヤットとリーは苦笑しながらロンドン橋を通る路面電車からテムズ川を眺めていた。

昼間の薄暗い雲は嘘のように消えてなくなり、かすかに姿をのぞかせる陽が、ロンドンの都市に見える。

キヤットはロンドンが好きだった。歴史的にも、また現在の状況から言っても血塗られた歴史の多いこの都市がどこか好きだった。例えるなら、傷だらけの老龍のような、そんな町なのだ。

そんな大好きな都市を眺め、またそのロンドンを初めて目にするリーに目を向ける。

「ところで、なんで義勇兵になってイギリスに来たんだ？」

眩しい夕日から、キャットに目を向けると

「母がイギリス生まれだったんですよ。亡くなりましたが、私が幼い頃、イギリスや母の生まれ故郷の話の話を良く聞かされていたので、なにか出来ればと思いますよ。」

リーはアメリカ人ではあるが、母はイギリス生まれで、父は中国人の血を引くアメリカ国籍の男性であった。アメリカで生まれたため、アメリカの国籍を取得したのだった。

「父は中国人なので、中国大陸に渡って義勇兵になる手もあったんですが、一度イギリスを、母の生まれ故郷を見てみたいという気持ちもあったのでレポート（ドイツの潜水艦）に追い回されながらなんとかイギリスに渡ってきたというわけですよ。」

どこか、涼しげな顔を夕焼けに染まる空に向けながらリーは言った。キャットはそんな彼の顔を見て、どこか和やかな気持ちと、胸がウズズスる感覚を覚えた。

どんな気持ちかはよくわからない。

だが、悪くない気分だった。

「そうか、で？どうだ？イギリスって国は？」

「ええ、すばらしいです。アメリカにはないような、英国的文化が街や服や言葉に多くみられます。コーヒー党のアメリカと違って、紅茶屋なんかも多くて。言葉も通じますし、とてもいいところですよ。」

口が丁寧なので、お世辞かと思ってしまうが、彼の目をみればそうでないとすぐわかる。どこか、未知の体験をする子供のように目をイキイキさせている。

父の遺伝であると思われるアジア系の顔立ちや、細い糸目、母の遺伝と思われる金色の髪。

「そうだな、中国と違って言葉も通じるしな。」

少しにやけた顔でリーに言う。

「もともとアメリカ人はイギリス人でしたからね。」

英国からの独立までアメリカはイギリスの植民地であった。
キャットは少々の苦笑を交えてリーを見た。

2人の青年パイロットはその若さに似合う、いたずらっぽい目をしていた。

彼らは優秀なパイロットであったが、優秀な大人にはまだなれていない。なれていなくて正解だ。

彼らはまだ、子供なのだから。

走る路面列車。流れていくロンドンの景色を輝く目で眺めるリー。

キャットはそんなリーを暖かく友人として向かい入れた。

後に、連合の獅子シオと呼ばれるアメリカ人の青年。

また、現役、イギリスのボス猫と呼ばれるイギリス人青年。

今日、リーがキャットと同部隊に配属されたことは、まったくの偶然ではないと言うことを、後の運命が語っている。

路面列車を降り、ロンドンの中心から少し外れたところにある古い小さなレンガ造りの家まで徒歩で行動した2人。このレンガの家こそ、キャットの家であった。

ところどころコケやツル科の植物が巻きついたレンガは、どこかおしゃれで、軽い喫茶店のような印象をやきつける家であった。

家の敷地に入り木製の彫刻が施してある扉をあける。

「君は、家に鍵をかけたのかい？」

リーは少し不自然そうにそう言った。

「ああ、家には留守番がいるから大丈夫なんだよ」

そう言っただけでキャットは家の奥に向かって声を上げる。すると奥から

トテトテと足音をさせながら1人の少女がかけてきた。

「！」

リーは驚いていた。

少女は美しかった。黄金の髪は肩まで伸ばし、どこまでも澄んだ青色の瞳、きりつとした唇、が印象的な少女であった。年齢もリーやキャットとさほど変わらないだろう。

少女は2人との前で立ち止まると、キャットが持っている荷物を受け取り、リーに視線を向ける。そして、かすかに微笑むと、リーへ軽い挨拶をする。

澄んだ瞳はどこか清楚で、清らかだった。そして、深く、どこまでも吸い込まれそうな感覚がする。

簡素な平民ドレスにエプロンをしている様子は、彼女の年齢に適正ではなかったが、ドレスで手を拭く仕草や、それなりに使い込んでいるのか所々についた食材のシミなどから、その少女にその格好が板についているということが見て取れる。

リーは驚いていた。確かに、その少女が美しいことにも、玄関に来るなりキャットの荷物を持つという奥様じみた行動にも青く澄んだ瞳が、どこまでも吸い込まれるように美しいことにも驚いた。

しかし、彼が驚く所は他にあつたのだ。

「キャットさん！この人、ゲルマン人じゃないですか！」

リーは少女を指差すとキャットに叫んだ。

「うん。だが正確には、ゲルマン人とイギリス人のハーフだよ？」

キャットはすこし眉を吊り上げて、リーを見る。

「げ…ゲルマン人ですよ？ドイツ人じゃないですか！」

リーは興奮していた。キャットはそんなリーを見て少しだけ残念そうに肩を落とした。

「俺に家に招かれた客は、戦争が始まってからみんなそう言っさ」
キャットはリーを見るとそう言った。

「だがね、ドイツ人ではないよ。彼女はちゃんとイギリス国籍を取
得してる。」

「で・・・でもですね」

リーは不満げだった。キヤットはまたため息とともに肩を落とした。「リー、人種は違えども彼女はイギリス人だ。」

「キヤットさん、彼女はあなたが落とす敵機に乗った種族と同じ人種なのですよ？」

リーは当然のことのように言った。キヤットはそう言われる事をわかっていた。

戦争なのだ、皆が皆、誰かを責めでもしなければ気持ち収まらないのだ。

それも戦争だった。

戦争は人を狂わす。とくに、毎日の大空襲という絶望的状况では、相乗効果が働き、人々は不安にかられる。

だが、

「リー。なら言うが君の父は中国人じゃないか。」

「そ...それは」

「人種が同じじゃないと祖国を持たないのなら、君もおなじだろう？もし、持てないなら国家とはたんなる動物の群れだ。アメリカは群れなのかい？イギリスは群れなのかい？そうじゃないだろう。アメリカもイギリスも国だよ。」

キヤットの目は鋭かった。この言葉も、家に来る客に何度も言ってきたセリフだった。

人によって受け止め方は違うが、キヤットは誰にでもそう言ってきた。

戦争によって種族差別は激しくなっている。

それによってイギリスで生まれてしまったイギリスとドイツの中間の少女は肩身の狭い思いをしていた。

「リーさん、とりあえず上がってください。」

少女はまた、少しだけ微笑を顔にたたえると、リーの荷物を受け取った。

どこか控えめに家の奥へと消える少女の背中を見た後、リーはキヤ

ツトに背中を押され彼の家へと入った。

家は見た目どおり狭い家であった。壁は内側もレンガでできており、小さなキッチンと暖炉と机が置いてあるリビングがあった。暖炉には火はともっておらず、ところどころにある窓には空襲対策にガムテープが貼られ爆風でガラスが飛び散らないようにしてあった。

「まあ、座れよ。」

キャットはリーに椅子を勧め、座らせた後に自分もリーと対峙する位置に腰掛ける。

少女はワインボトルとグラスを持ってくると、2人の前にグラスを置き、ワインを注ぎ始める。

「フランス産のワインだぞ？今じゃめつたに見られない代物だ。」
キャットは得意げに言う。フランスはドイツの占領地になっているため、とても貿易ができる状態ではない。そのため、戦争勃発からイギリスに入ったワインは無に等しい。

もちろん、このワインは戦前に買ったものを取ってあっただけである。

グラスに真紅の液体が注がれる。近づかなくても葡萄の甘い匂いが漂ってくる。そして、それをこぼさぬように、真剣な目で注ぐゲルマンの少女。リーは少しだけその目にひきつけられた。身に着けた粗末な着物。それは、彼女の顔が美しすぎるため目立たぬようにうまく緩和していた。

もしも、彼女が美しい衣服に身をつつんだら、いったいどうなってしまうだろう？

リーは彼女がゲルマン人だということなど、その瞬間すっかり忘れていた。

見つめるリーの視線に気がついた少女は、リーに視線を送ると小首をかしげる仕草をする。

リーはどこか恥ずかしくなって、多少顔を朱色に染めながら目をそらし、注がれたワインに目を移す。

「ふ・・・フランスのワインなんて初めて飲みますよ」

キャットに話を持ちかけると、キャットは多少なりとニヤケた顔をつくってから、返事を返す。

リーは自分の心境を悟られたのではないかと、少し焦り、その様子をキャットはにまけた顔でみていた。

さ・・・さとられてる。

一瞬でも、この少女にトキメいた自分が恥ずかしい。と中国系アメリカ人はうつむいた。

パン、スープ、チーズを少女がテーブルの上にそろえると、キャットは少女に座るように言って、彼女のワイングラスにワインを注ぐ。

キャットがグラスを軽く上げる。

少女もそれに続いてグラスを上げる。

「では、ドゥーモ・リー・リョアル君の無事と活躍を祈って！」

「あの、僕の名前はドォーモ・リー・リョルガなのですが・・・」

「乾杯ー！」

「乾杯！」

「あつ・・・無視？・・・乾杯」

なんだか複雑な気分なリーを無視して、キャットは豪快にワインを飲み干す。リーもそれに続きワインを口に含む。甘い。赤ワインは甘い。みれば、少女もかなりのスピードで飲んでいった。

「おっと、紹介が遅れたな。こちらモニカだ。」

キャットが少女をリーへ紹介する。そして、

「モニカ、こっちがさつきも言ったドォーモ・リー・・・ニョウガだ」

「いやいやいやドォーモ・リー・リョルガなんですか？ニョウガって誰ですか！」

リーが言っがキャットは気にしていない様子。リーはあきれて、ワインをのどに流し込む。

少女、モニカはリーに挨拶を入れる。

「はじめまして、モニカ・スファアンテです。えつと・・・ドオーモさん・・・よろしくお願ひします。」

「僕のことはリーと呼んでくれて結構です。その・・・先程は大変失礼いたしました。会って突然」

リーは少し反省しているようだ。彼は戦争が好きの人ではない。それに、彼は知っている人だった。敵も味方も関係なく、人間として生を受けた者はかならず喜んだり、悲しんだり、心配したり、笑ったり、憎んだり、愛したりすることを。

自分がさつき、モニカにやったことは人種差別であった。イギリスに来る途中の航路で、ドイツのUボート（潜水艦）に船が狙われて、敵の怖さを少しだけ垣間見たため、気持ちが恐怖とその恐怖をもたらしたもののへの恨みに変わっていたのかもしれない。

「気にしないでください。私にはあなたの言うとおり、ゲルマン人の血が流れていますから。」

その言葉でリーはまた申し訳なくなった。戦争が始めたのはドイツだが、その民族と同じだからといって彼女が悪いわけでもなんでもない。

「すみません。戦争だからという言い訳は通じませんよね。」
リーの言葉。それを聞いて、キャットは話に入る。

「モニカの母親は、ドイツの普通の少女だったんだよ。第一次世界大戦で負けたドイツは多額の借金とインフレになやまされて、経済はボロボロ。路頭に迷う人は後をたたず、飢え死にする人も多くいた。それだから、身売りする女性も少なくなくてな、モニカの母親も売春婦としてイギリスのとある資本家に買われて、イギリスにやってきた。それから、腹に子供を授かったら、そいつは母親を捨てたんだ。ドイツに帰るお金もなく、モニカをイギリスで生んだ。モニカはその後無事に生まれたが、母親のほうはモニカを6歳まで育てて死んでしまった。」

モニカにはつらい過去だ。だが、彼女はその過去と向き合い、立ち

向かっていた。

「母の死後、幼い私は路上をさ迷い、何だかわからないような生ゴミを食べて、路上の日陰でへたり込み、同年代の子供たちに石をなげつけられ、その親たちに遠ざけられる。そういう生活をしてきました。その頃の私は、太陽と月があと何回昇ったり降りたりしたら私は死ぬのだろうか？とか考えてました。」

彼女の目にはつらさの感情がにじみ出ていないわけではなかったが、遠い過去のふっ切れた思い出として語っているようにみえる。

「そんな時、道端で寝ていた私にキヤット君がつまづいて転んでしまった。キヤット君は軍人だったから、下手したら殺されるかと思つたから、必死に謝つたんだよ。」

モニカはキヤットに視線を送り懐かしそうに笑った。

「だが、俺は許さなかった。」

キヤットはニヤリと笑った。

「その時、イギリス空軍としてフランスへ出兵に行かなくちゃいけなくてね。どうしても、家にいた猫の面倒を誰かに見てほしかったんだ。」

キヤットもまた、過去の思い出を愉快そうに語る。

「キヤット君たら、見ず知らずの私を家に招いて一生懸命、猫の世話の方法を教えるんだもの。」

ひよんなこととで出会った2人。結局、キヤットはフランスで名声を上げ、ダンケルク撤退作戦終了とともに祖国へ帰還し、猫と猫の世話係のいる家に戻ってきたというわけであった。

リーはひどく真剣に2人の会話を聞いていた。楽しそうに語らうこの2人、キヤットがイギリスに帰ってから2人の間にどんなことがあったのかリーは知る由もないが、今の彼らはお互いの間に種族や国家なんてつまらない壁が一切ない零距離キルゾーンの世界が広がっている気がした。

リーはキヤットに出会い、まだ1日しかたっていない。モニカにかけては、まだ数時間である。それでも、リーは2人の関係をうつ

すらと感じ取ったのだ。

「キヤットさん。あなたはすごいお人だ。モニカさんも。」

リーにキヤットは言う

「バカやろう。すぐくなんてねえー！お前もできるさ、モニカのとカワイイと思わないのか？」

キヤットの意味不明な言葉に

「えっ・・・それは、とても可愛いですが、その」

言葉を詰まらせるリー

「だろ？これで、お前のモニカへの偏見はないということになった。お前にもできたじゃないか。」

キヤットは酒に酔ったのか、少し火照っている。ワインボトルをみると、結構な量を摂取したらしい。

「誰だつてできることじゃないってことぐらい、俺だつてわかる。」

「じゃなきゃ、こんな戦争、起こる分けない。でも、これこそが、俺たちの出来る小さな反戦行動だと思わないか？」

キヤットはそこまで言うと、グラスに液体をまた注ぎのどを鳴らしながら豪快にのんでいく。チーズをパンに乗せて口に放り込み、またワインを口に含み今度は舌で味わって飲んでいく。

「反戦ですか・・・」

リーの呟きを聞いたモニカは、やはり少し酔ったようで、頬を赤くした状態でリーに語りかけてきた。

「戦争なんです。誰かが誰かを憎んで恨んで悲しんで心配して当然の時代なんです。リーさんが、ゲルマン人を見て偏見を持つのも、しかたないのかもしれない。でも、あなたはそんな私を今は受け入れてくれてるじゃないですか。たとへ形だけだとしても、それは大切なことだと思いますよ。」

モニカは美しい顔にまた微笑を浮かべた。またまた恥ずかしくなつたリーは目をそらす。

「今は形かもしれませんが、よければこれから仲良くしてください。」

リーは頭金の髪をいじくりながらそう言った。モニカもはいの返事をする。

「おい、モニカ。もう一本、ワインもってこーい！」
よっぱらった19歳。いいのか飲んで！19歳！

そんなキヤットを見てリーは少しだけ唇をほころばせた。

（反戦ですか。なんだかいいですねそういうの）

キヤットの命令で、ワインを持ってきて注ぎ、3人でのみ、他愛無い話をしたり、酔っ払った勢いで権力者の悪口を言ったり、冗談で下ネタを言ってみたりした。

いつのまにかワインは3本も飲み干しており、おつまみも切れてモニカとリーはテーブルにうつぶせの状態、キヤットは足をテーブルに乗つけると、背もたれに体重をかけた状態で酒の大量摂取による快感的な睡魔に夢の中へと引きずりおろされていった。静かな夜に、彼らは自分たちの鼻息を子守唄に眠ってしまったのだ。

ナチス・ドイツ帝国。第一次世界大戦で屈辱的な大敗北の後、多額の賠償金と土地を取られ、発展途上国へとなりさがった悲運の国家ドイツ。人々は飢えと貧困に苦しみ、明日の希望にまで目を閉じる。そんななか、アドルフ・ヒトラーという男が、ドイツを統べる総統になり、ナチスドイツを作り上げたことは必然と呼べたのかも知れない。彼は、人々にパンを与え、公共事業を起こし失業者を減らし、屈辱的なベルサイユ条約を堂々と破棄した。共産主義やイギリス・フランスなどを深く憎み、また自分を支持するものを深く愛した男であった。

ドイツ空軍、第21夜間爆撃隊が編隊でイギリス海峡を飛行していた。彼らは、ドイツ領フランスに造られたドイツ軍飛行場から飛び立ち、ロンドンとその近辺へ爆弾を運んでいるのだ。夜間爆撃に使用されているのはユンカースJu88と呼ばれる爆撃機だった。

昼間の爆撃には、ドイツ空軍には大きな問題があった。一般にドイツの飛行機は航続距離がとても短いのだ。爆撃機を守る戦闘機は燃料を気にしてなかなか実力がだせず、爆撃機が大損害を受けることが多くあった。そのため、敵が飛び立てない夜間に爆撃を行うほうが戦果を上げている現状である。

このユンカースJu88は、2つのエンジンをつけた双発爆撃機であり、速度は戦闘機を凌駕するため、万が一夜間戦闘機に狙われても振り切れ、しかも爆弾は2tも搭載できるといったかなりの高性能な爆撃機である。

夜間爆撃機として、夜間の爆撃はほとんどユンカースju88が担い、ロンドンを主要とした各都市への爆撃を行っている。

だが、今日の彼らの出撃はただの爆撃ではなかった。夜間爆撃にしては多すぎる数のユンカース飛行艦隊がイギリスに向かって飛行

している。その数1000機。イギリス空軍は優秀なレーダーを使って迫り来る大艦隊をすでに察知しているだろう。が、しかし、これだけの数をどう対処していいのかわからないに違いない。たとへ、護衛戦闘機が一機もないとしても、とても防ぎきれない数であった。

これは、ただの夜間爆撃ではない。

「機長どの、たった今、上層部から作戦開始指令がだされました。」
若い通信兵がとあるユンカースの通信室から機長に言う。機長は電信の紙を受け取ると

「わかった。」

と、いぶかしげにうなずく。機長はユンカースのテラスのようにガラス張りになった機首の中からうつすらと見えるブリテン島イギリスをみながら通信兵に背中を向ける。ドイツ軍の将校軍服に身を包んだ、威厳のある背中。彼は、まだイギリスを見ていた。

「全爆撃編隊に伝えよ、予定通り”巨人の渡河作戦”を敢行すると全機、決められた場所を爆撃せよ。」

「了解。」

通信兵は連絡を開始する。気がつけば、イギリスは目の前だった。ここをまっすぐに行けばロンドンである。

「全機機首を進路に向けよ、わが編隊はレーダーを攻撃する。」

機長の言葉がそのまま、同編隊に発光信号で知らされる。そして操縦士が方向を変える。

大爆撃隊が巨人の渡河作戦の下準備を開始した。

ドイツ空軍にとってもっとも邪魔な、ロンドン近辺のレーダーサイトを徹底的につぶす為に。

機長は、編隊へ命令を送ったことを確認すると、また機首からイギリスを眺めた。

ユンカースのテラスのような機首から、薄暗い中、つきの明かりによって夜の景色が見える。そして、機長は立っていた位置からまだ、外をのぞいていた。

その目に映るのは、良くも悪くもイギリスだけであつたのだが・・・

突然、大音量の警報がロンドンに鳴り響いた。耳をつんざくような音。この音を聞いたびにロンドン市民は恐怖から嫌な汗をかいてしまふ。どこにもこの音が好きな人はいないだろう。これは、大切なものを燃やされかもしれないという警報なのだから。俗に言う、空襲警報である。

キャット達のいる家も例外ではない。キャットのレンガ家はロンドンのすぐ横にある。爆弾が落ちたことこそないが、近所に落ちたことが何度かある。

跳ね起きた3人は、アルコールの回つた頭をフル回転し、パニックを抑えようとする。軍人であるキャットやリーにとってはそこま

で驚くべきことではないが、一般市民のモニカにしてみれば死が近づいているように聞こえる。

キャットとリーは無言で立ち上がると、キャットはモニカを抱きかかえ、リーは指定された貴重品を持って庭に出る。小さな庭の一角に人が1人通れるほどの大きさの穴が開いており、キャットはその中にモニカを押し込み、続いて貴重品とリーを入れて、最後に自分も入る。

薄暗い穴の中を降りていくと、その穴は比較的広い場所に出る。キャットとモニカが空襲に備えて掘った簡易防空壕である。入り口は気の板で頑丈に固定されているので、生き埋めにはならないだろう。また、意外と深い。

「それだけじゃないぜ、万が一のときは下水道に降りれるようになる。」

キャットが少々、自慢げにリーに語り、リーは素直に感心した。空襲警報発令から、数分後、大量の飛行機のエンジン音とともに爆弾投下の音が聞こえる。そして、破壊の音も聞こえる。イギリス軍は対空砲で応戦しているだろうか？エンジンの轟音からして大部隊だろうから、とても対空砲では押さえ込めないだろう。

「ユンカースJu88ですかね？」

「おそらく」

爆弾を投下する爆撃機を推測する2人。ユンカースならば、高度的に対空砲ではほぼ撃墜不可能である。そう、冷静に判断した。彼らは軍人だった。キャットはすでにエースであつたし、リーは実践こそまだだが、アメリカ軍にいた時に軍人の精神を叩き込まれていた。轟音とともに地響きが起こる。3人の上からパラパラと砂がふってきた。ほこりっぽい防空壕。外は火の海地獄だろうか？

たまに、人の叫びが聞こえたり、またすぐ近い場所から爆発音がしたりする。

「今夜の爆撃はやけに激しいな。」
キャットが眉毛を動かす。

「明日、ロンドンは瓦礫のやまですかね？」

リーはキヤットに聞いた。たぶん、とキヤットは答える。

投下、炸裂、破壊、悲鳴、さまざまな音が防空壕の入り口から入ってくる。

死と、恐怖とが渦巻く世界が一步外にある。

「2人は怖くないの？」

平然とした顔の軍人2人に、モニカは問うた。震える手や、青ざめた顔。彼女は一般市民なのだから当然である。

不安そうな顔を向けるモニカに対し

「大丈夫、ここにいれば爆弾は当たらないよ。」

キヤットは自分にしがみついて顔をうずくめる少女に返答したが

「今日はね、でも明日もあさってもあるんだよ？」

しがみつく少女。ロンドンの轟音や敵機のエンジン音、そんなものは少女の言葉によってどこか別世界の音へと変換されてしまった。

キヤットは少女の声に集中する。

「大丈夫、明日もあさっても、この防空壕に入ればいいじゃないか。」

キヤットは安心させようと必死に言う。少女の顔は自分の胸にうずくまって見えない。ただ震える手と、着ているシャツが生暖かい雫で濡れるのを感じるだけであった。

「私だけじゃないよ。今日も、明日も、あさっても。きっと誰かが怪我したり死んだりしてる。」

キヤットは言葉につまった。キヤットは人殺しが好きではないが軍人である以上、敵機を落とさなくてはならない。その誰かに自分の殺めた魂が入るのだと感じると、とても安心させる言葉が口からでなかったのだ。

土の粉が舞い散る。土臭い防空壕の中、昼間爆撃の恐怖を1人で味わわなくてはいけない少女の心細さが今ココで爆発した。

モニカは怖かった。自分が死ぬのが。他人が死んだり怪我したり

するのを見るのは嫌だった。自分もそうなるのではないかという不安に駆られるから、そしてその人が二度と立ち上がることがないと言う事をまったく実感できずに、それでも心のどこかで理解してしまっている自分が怖かった。また、戦争の最前線で戦うキャットが動かなくなつて、二度と自分の前に顔を出さなくなるというのも非常に怖かった。リーにいたつても同じである。リーも明日から戦場へ出る。今日会ったばかりとはいえ、これから何度か親交を深めるであろうと予感はしていた。だが、もし明日そんなリーも動かなくなつたら？

敵の昼間爆撃は、イギリス戦闘機は迎撃に出る。キャットも何度も出撃した。リーも明日からそうなる。

「私だけじゃないよ。私、あなたが死んだら、生きている意味を見失いそうだから」

少女の顔は見えない。先程よりも抱きついた手の力が強くなつているのを感じる。キャットは少しうつつむき、美しい金色の髪で顔を隠して見えてなくなっている。

だが、うつつむいてはいるが、彼の手は少女の頭を抱え込むようにしていた。

モニカも自分がキャットに何を言っているのかよくわからなかった。ただ、自分の不安を、キャットにたたきつけているだけなのかもしれない。だが、キャットはそれを受け入れて少女を抱きしめていた。

「いいかい、俺が君を守るから。たとへどんなにこの手を汚してもね。だから安心して防空壕に入れればいい」

キャットは静かに言った。今、自分の手の中にいるゲルマンの少女へ向かつて。

少女は何も言わずしがみついていた。

リーはそんな2人を見ながら、再度思っていた。この2人は零距離キルツに住んでいて、お互いを本当に大事にしているのだな、と。

これを愛というのか。

その姿は美しかった。戦場であっても、死が蔓延しているこの場であつても、リーの目にはただ、つまづいただけの出会いだった。二人が、自分たちのために命を削って心配したり守ったりする姿が感じ取れ、自分の胸に熱いものを感じた。

爆撃音は未だに続いているが、3人の耳には入ってもすぐ出て行つてしまう、本当にどうでもいい音と変換されてしまった。

空襲が終わつても、3人は防空壕から出ずに、一晚を明かした。アルコールが睡眠を早めたのだろう。

三人に意識が戻つたのは気持ちのいい木漏れ日が、防空壕の出口から注ぎ、小鳥たちがさええずる、のどかなロンドンの朝であつた。

2・飲んでいいのか？19歳！（後書き）

どうも・・・ねこたんにしては投稿はやっ！とか思った人！挙手

メインの生会愛死は半年に1回の更新なのですが、こちらは1日で更新？

実は、これ昔、書き貯めたものをコピペして載せただけです^^；

コメント、感想、評価・・・心よりお待ちしております ココ重要
よおおおおお

3 巨人の渡河作戦1 (前書き)

3話

3・巨人の渡河作戦1

飛行場への出勤が少々遅れてしまった2人は、上司から怒られた。今日は、昨日から新しく入った新入りパイロットのための講習会が行われてりる。

もちろん、講習中であつても敵が来れば即出勤である。

「では、ドイツ軍との基本的交戦方法を教える。みなはこれをよく心して戦つてほしい。」

講習室の壇上に立つた第9防空戦隊司令長官の髭のおっさんは、昨日と同じように配属されたパイロットに話を開始する。なぜかキャットなどの熟練のパイロットである人も参加させられている。

「では、まず、イギリス本土でのドイツとの戦闘は圧倒的に我が軍が有利である。なぜなら敵の爆撃機はのろまで、しかも貧弱であり、それを護衛する戦闘機も航続距離の問題で十分に戦闘できないためである。フランスの飛行場からロンドンまでは200キロ以上もあり、なおかつ往復となると400を超える。敵の主力戦闘機であるメッサーシュミットBf109の航続距離は500そこら。これでは、ロンドン上空でまともに戦えないわけである。我が軍のハリケーンは重武装なので、爆撃機を、スピットファイヤは機動力が良いので、戦闘機を落とすことに専念するように。また、昼間爆撃には3種類の爆撃機が使われている。ハインケルHe111、ユンカースJu88これらは2つのエンジンを持った爆撃機で、あと一種、スツーカーというのがあり、急降下のためだけに作られた爆撃機である。スツーカーの場合は軽爆撃機なのでエンジンは1つだ。」

ベラベラベラベラしゃべりまくる髭のおっさん。キャットのとなりに座るリーはなにやらメモをとっていた。

リーのマジメな姿をみて、だらけて座っていたキャットが座りなおす。人の振り見てわが身をなおせ…少し意味が違つかないかな？

おっさんが言つてゐることはどれもこれも空軍では一般的で、ドイツ

の戦闘機メツサーシューミットBf109は軽快で機動力が良く、かなり手ごわい相手だが、それも帰りの燃料を気にしなくてはいけないロンドン上空ならおとなしくなるのだ。また、ユンカース、ハインケルといった双発爆撃機（エンジンが2基ある）や急降下爆撃機スツーカーも航続距離に問題がある。イギリス上空ならいかに強いドイツ空軍でも苦戦を強いられるのだ。

イギリスが苦戦しながらも、本土を守っていられるのはドイツ空軍機の航続距離の長さのおかげである。

言ってしまうえば、英空軍ハリケーンと独空軍メツサーシューミットがタイマンをすれば、ハリケーンの勝率は低い。スピットファイヤでも五分五分である。だが、英本土なら敵は弱体化し、得意の旋回能力が十分に発揮できない。そのため勝率は格段と上がる。

これを理由に、イギリス首相チャーチルはドイツに対して徹底抗戦を発表して強気の姿勢でいる。

「まだ、勝機がある。」
チャーチルはこう言っていたそうなの。

リーはスライドに映し出される敵機を見ていた。

ユンカース、ハインケル、メツサーシューミット……数々のナチスドイツの傑作機が映し出されていく。

髭のおっさんは、それぞれの機の特徴、死角、脅威を説明していく。たまに変な話もまじっていたが、半分以上は自分の命を守るための大事な知識であった。

そして、最後にJu87スツーカーと呼ばれる急降下爆撃機のスライドを出す。パイロット達を見回して、つばの飲み込みの悪い口を開いた。

「ただし、これだけは言っておく。スツーカーは急降下させなければそれほど脅威ではない。奴らが急降下を開始すればスツーカーは本物の悪魔になるが、通常飛行時は速度も機動性もよくなければ、後方機銃も1つだけだ。だから、奴らが急降下する前にたたけ。だが・

」

おっさんは、またパイロットたちを見回した。全員、自分より若い。この中にはまだ一度も実戦をしない青年たちがいて、次の出撃に出で行ったつきり、もう2度と帰ってこない奴がいるかもしれない。だが、おっさんは少しでも生還率が上がるように。若者たちに言った。

「機首に白い鳥が赤い花を加えて羽ばたいてるノーズアートが描かれたスツーカーを見たときは、かならず熟練パイロット、または本部に連絡を入れる。初心者はおるか、エースパイロットでも撃墜は難しいやつだからな。」

髭のおっさんはひどく真剣な顔であった。

「下手に近づくと、戦闘機でも撃墜される。」
パイロットたちの間にざわめきが起こった。

速度も、機動能力も劣っている爆撃機に戦闘機が撃墜される？
よくわからない様子だ。

ざわざわするパイロット達を咳払いで黙らせるおっさん。

「いいか。先日、ポーツマス軍港に停泊中だった戦艦がそいつによって1隻撃沈された。フランス航空戦のときも、ダンケルク撤退作戦のときも、白い鳥を描いたスツーカーがいたが、それに乗っているパイロットは、我々の想像をはるかに超える操縦技術を持っていると予想できる。戦闘機の機銃を方向舵のかすかな操縦でかわし、急降下用のブレーキで空中に一瞬だけ停止して、速度的に追い越してしまう戦闘機の過ぎていく背中に主翼の7.7m機銃を浴びさせ撃墜する。そいつが急降下射程に入るともう終わりだ。急降下されたら最後、対空砲火は当たらないし、戦闘機じゃ撃墜不可能。悠悠と目的物を破壊し、急上昇して帰路につく。」

おっさんは、手を飛行機の形にして状況を説明する。だが、パイロット達はよくわからなかった。

その話を聞いて、見たら逃げ出そうと考えた奴もいれば、中には俺が撃墜してやる、と思った奴もいた。

そんな奴、俺が撃墜してやるぜ。と仲間と言って騒ぐ兵士や、それ

を聞いて、おまえには無理だよ、と言って笑う奴もいる。

キヤットは実戦経験の少ない彼らを少々哀れに思った。戦場は甘くない。昨日まで一緒に酒を飲んでいた奴が、愛機を棺おけに墜落していったのをキヤットは何度も見てきた。

だが、だからと言って戦場に行く前にドンヨリとした空気をしていられるのもあまりよくはない。今から死にいくのだと思えば、自然に体が緊張し、無駄な緊張は操縦を誤らせ、それが原因で死んでいく奴もいる。

笑いは時に薬になり、毒にもなる。それをうまく使い分けることが大事だ。たとえ、どんな状況でも笑って乗り越えられる奴は強いし、ウジウジした奴は取り残される。

「リー、お前はどうか？ 撃墜したいか？」

キヤットは隣のリーを小突いて聞いた。リーは苦笑しながら

「キヤットさんが手伝ってくれるなら行きますよ。」

と言いつつ。

今度はキヤットが苦笑した。

手伝う・・・か

キヤットはリーに「いいだろう」と言うと口元を緩めた。また、それを見てリーも笑った。

2人は笑った。これが、毒か薬かまだわからないが、とにかく2人は笑っていた。

「言つとく。たぶん、今日の昼過ぎあたりに大規模な爆撃があるに違いない。」

笑ったりしていたパイロットが一瞬にしておっさんに視線を送った。

「それは、何を根拠にしてでしょうか？」

若い将兵がおっさんに質問する。おっさんはその少年を少しだけみやると、スライドにイギリスの地図を写した。

「昨日、貴官らもしつてるように空襲があつた。しかし、不自然なことに恐ろしい数の敵機だった。その敵機がロンドンおよび、その航路のリーダーサイドをすべて徹底的に破壊した。復旧の目処はた

つておらん。たぶん、今日大規模な作戦があるのだろう。だから、心して待機しておれ。」
おっさんの目は厳しかった。その言葉の後、笑いをこぼしたものは1人としていなかった。

「ヴェント大尉！」

ドイツ領フランスにあるドイツ空軍飛行場作戦司令部の施設の廊下でユンカースJu88機長、ヴェント少尉は呼び止められた。

「ユーリ・ローゼ少尉。どうかいたしたか？」

威厳ある髭、黒い軍服、そんな姿のヴェント大尉は呼び止めた相手ユーリ・ローゼをみやる。

「どちらへ？」

ユーリはヴェントに聞いた。ヴェントは一瞬だけ眉毛をよせると「司令長官がお呼びだそうだな。いま、会いに行くところじゃが？もしか、そなたもか？」

ヴェントの問いにユーリは軽くうなづく。

「ヴェント大尉、昨日の空襲は大戦果おめでとうございます。」

ナチスのマーク、ハーケンクロイツ鍵十字が刻まれた軍帽の下にある美しい瞳がヴェント大尉を見上げた。

「なに、味方は1000機もいた。私だけの功績ではないよ。」

ヴェントはそんなユーリの視線を気にせず話を続ける。カツカツと廊下に2人の軍用ブーツの音が木霊する。

「しかし、大尉の指揮のおかげでロンドン周辺のレーダーサイドがすべてダウンしたとお聞きました。」

続けるユーリにヴェントはそんなことはどうでもいいような態度を示す。そして、話を変えようとする。

「ユーリ、そんなことより、その年でまだ好いた男1人もできんのかね？」

突然の質問にユーリは瞳を見開き、純白の肌を紅潮させる。

「ど…どういうことでしょうか？よく、理解できませんが…？」

あたふたと手を振るユーリにヴェントは少しからかうように続ける。

「そなたほどの容姿ならば、愛を告げる男性も多かるう？」

それを聞いてユーリは、さらにあせりを隠せず、あたふたと手を振る。

「ななななぜ、そのようなことをお聞きに？」

ヴェントは少しだけ唇を曲げると

「おぬしの父親代わりをしておると、少しはそういうことも気になつてのな。娘の式ぐらい見てから死にたいからのう」

ユーリは黒い将校服とは正反対の真っ赤な顔をしていた。そんな林檎顔を軍帽を深くかぶって隠す。

そんな義理娘を見て、少しばかり微笑する大尉。

そうこうしている間に2人は司令室にいた。つまりこの話は保留である。

ノックする。返事があり中に2人が入る。

そして、かかとを鳴らし、右手を斜め45度にかけてナチス式敬礼を奥にいる指令長官に送る。

部屋にはすでに数人の将校達が集まっていた。

「よく来た、ユーリ少尉、ヴェント大尉」

やせた司令長官はゆっくりと言う。

「諸君、知っていると思うが今日の午後1時から、我がドイツ空軍によつて巨人の渡河作戦、暗号名マリンプルー作戦が敢行される。

作戦内容は知っていると思うが、もう一度確認を取りたい。」

指令長官がそう言うと、隣に立っていた補佐官が壁にかけてある黒板にチョークでなにやら書き始める。

「巨人の渡河作戦では、約4500機の飛行機が使用される。最大の問題であった航続距離は、ドーバ海峡中間地点に特設給油空母を配備し、戦闘機のみ途中給油を行うということで解消する。これにより、戦闘機は燃料に悩むことなく存分に護衛が可能になる。」

ドイツ将校達はその話を聞いて少し安心した様子を見せる。この飛行基地にあるのはほとんどが爆撃機なのである。必然、ここにいる将校たちもほとんどが爆撃機乗り達なのである。

「今回の作戦では、イギリスの首都ロンドンと近郊の軍需工場が目標だ。爆撃隊は爆弾投下後、戦果確認の後にただちに帰還せよ。戦闘機編隊は燃料に余裕がある限りロンドンに留まり、敵の戦闘機を落とせるだけ落とせ。以上だ。なにか質問は？」

ユーリが手を上げた。

「なんだね？ユーリ少尉」

「ドーバ海峡に特設給油空母を派遣するのはわかりましたが、空母は敵の脅威にさらされないのですか？」

ユーリの質問に、司令長官は少しだけ顔をゆるめると

「心配はない、駆逐艦2隻とUボート（潜水艦）6隻に防御されている。空からは絶え間なく味方飛行艦隊が飛行しているわけで、防衛は完璧だ。ほかには？」

「いいえ、ありません。」

ユーリはそれ以上なにも言わなかった。ヴェントもそんな義理娘を見て、何を思ったのか顔を苦くする。

「では、諸君の働きに期待する。解散！」

将官達がゾロゾロと部屋を退室する。ユーリやヴェントもそれに続く。

司令官室を出て、廊下を歩く。時折、下士官がすれ違い間際に敬礼をして通り過ぎていく。

「ヴェント大尉。どうにもこの作戦はイギリスを舐め過ぎていると感じます。」

ドーバ海峡は必ずしも私達の勢力圏ではありません。」

ユーリは小声でヴェントに言った。ヴェントは少しだけ考え込んでから。

「だが、上層部の決定じゃ。しかたあるまい？」

短く切つてある銀髪を軍帽の奥に入れながらユーリはうなずいた。

ヴェントは義理娘を見る。まだ、身長も顔立ちもオーラも幼く見える。大人の妖艶さより、少女としての可愛らしさのほうが目立つている。

「ユーリ、毎回言うがな、死ぬんじゃないぞ。」

ヴェント大尉は軍人としてではなく、父親として娘に言った。あまにも技術が優れすぎていたせいで、若くして戦争の前線で働くことを余儀なくされた我が娘を真剣な眼差しで見つめる。

そんな義理の父をユーリは見上げる。そして、少し笑いながら

「死にませんよ。父上を結婚式に招待せねばなりませんからね。」

ユーリは言った。ヴェントも、そんな娘の笑顔を見せられて唇を緩めてしまった。

2人は滑走路は建物を出ると、滑走路に出ていた。土を頑丈に固めただけの白い滑走路には、爆撃機ハインケルやユンカース、スツーカー等がところ狭しと並んでいる。

整備兵達は爆弾や機銃の弾を装填しているし、パイロット達は愛機の手エックを行っている。

「では、私はこれで。」

そう言っただけの爆撃機に向かっていく娘をヴェントは少しばかり見送った。下手をすれば、その背中を見るのはこれで最後になるかもしれない。ユーリが死ぬか、自分が死ぬか…2人ともが身を保てる保障は1つたりともない。

そう思うと、また不安が湧き上がってくるのだった。

「矢野、整備は順調か？」

愛機、ju87スツーカーを整備する整備兵、日本人技師の矢野にユーリは声をかけた。

「あ、はい。いつでも出発できますよ。」

日本人とは思えないほど流暢にユーリに答える

ユーリの愛機、スツーカー。急降下爆撃機として生まれた低速、低機

動な機体であったが急降下爆撃の正確さや、その驚異的戦果からドイツ軍の傑作爆撃機の1つとして数えられる。逆ガル翼や固定脚が特徴的で、エンジンも単発（エンジンが1基）である。

ユーリ機の機首には真っ白な鳥が花を銜え、翼を広げて飛んでいるアートを描かれていた。戦争には似つかない白い鳥、花：

空が蒼かった

「ユーリさん。整備のほうは終わりました。爆弾と機銃弾も装填が完了しましたのでぼくはこれで。」

雲が白かった

「ありがとう。整備終了の報告をしてくるといい」

どこまでも続く大地は、薄緑と茶色に覆われていた。

はい。と行って行こうとする矢野。それを少し考えてからユーリは呼び止めた。

ユーリは死を恐れていないのではない。死を恐れていないふりをしているにすぎなかった。だから、今も、矢野に頼むことで死んだときに人生を後悔していないと、自分に言い訳をするために矢野を呼び止めた。

「矢野。私にキスしてくれないか？」

突然の申し入れに矢野は転びそうになった。キスの文化が乏しい日本生まれである矢野はかなりとまどった。

「ななななな・・・なぜですか？」

「恥ずかしいことに、義理父以外に異性とキスしたことがなくてね。今日、死ぬかもしれないから、少しやってみたくなつたんだ。」

ユーリは平然とした顔で言う。だが、胸の裏側ではなぜか、心臓が跳ねていた。今にも破裂しそうな速度で…

「私では嫌か？」

ひどく真剣な目。銀髪、純白の肌、可愛らしい瞳。何もかもが矢野を混乱させる。本当に何もかもをだ…。

「いえ…嫌ではありませんが」

「なら、してくれ。お願いだ。」

周囲にはほかの整備兵やパイロット達が忙しそうに走り回っている。もうすぐ出撃の時間がやってくる。

矢野は戦争が始まって以来、ずっとユーリのスツーカーの面倒を見続けてきた。ユーリは戦争が始まって以来、ずっと矢野にスツーカーの整備を託してきた。

「わかりました。」

出撃のサイレンが鳴り始める。一番隊のハインケルHE111が双発エンジンをうならせながら飛び立っていく。土煙が舞い散り、あたりが土っぽい白になっていく。

その影に隠れて、矢野は日本人らしい不器用なキスをユーリに送った。砂が唇に混じってキスした瞬間、少しザラザラした。味はしない。ただ、やわらかな相手の唇と体温がほのかに感じられる。たった一瞬だったが、2人のはとてつもない無限を感じさせられた。

まるで小学生のようにお互いが幼く感じる。次々に出動していく爆撃機たち。ユーリは矢野を見ると、微笑んだ。矢野もそれをみてから微笑んだ。

「ありがとう」

ユーリはもう一度矢野に告げた。

感謝の気持ちをどんな複雑な言葉にも絡めずに、一言で告げた。

「ユーリ少尉！貴方の編隊の出撃許可ができました。」

下士官がユーリに知らせに来る。ユーリはうなずくと、もう一度だけ矢野の顔を見た。

そして、スツーカーに乗り込む。自分の愛機に。後部座席に、今日着任した新しい後部機銃手が乗り込む。

エンジンが唸りを上げ、プロペラが緩やかから勢いよく回りだす。ユーリの編隊がユーリ機の後ろに続く。滑走路を走る数機のスツーカー。

戻ってこれるかどうかもわからない、無事になどという言葉は一言も存在しない戦場へと、スツーカーは土煙を撒き散らしながら発進していく。

空がどこまでも青かった。

スツーカ隊に続き、次々と爆撃機、戦闘機が出撃していく。この基地では約100機が襲撃していく。

ユーリ機が米粒より小さくなるまで、矢野は空を見上げていた。なにやら切ない気持ちがあふれ出てくる…そんな気がして我慢できなかった。

風が追い風となって、ドイツ軍をイギリスへ押し出す。立ち込めていた土ぼこりも流され始めた。

雲がどこまでも白かった。

ほんの一瞬のユーリとのキス。矢野はこれをずっと先まで忘れることができなかった。

あの、やわらかな笑みとともに…

周りを戦闘機、メッサーシュエーミットBf109に囲まれて飛行するユーリのスツーカ部隊。飛行場から数十分から数時間、現在はドーバ海峡の海上を飛行中である。

「第31戦隊から第72急降下爆撃隊へ、給油に降りる。爆撃機隊は少しばかり速度を落として飛行せよ。」

戦闘機編隊からの連絡である。

「こちら第72急降下爆撃隊、了解した。速度毎時240km、同高度、同方向のまま飛行する。」

ユーリが戦闘機編隊長機に連絡を入れる。無線を終えるころ、海面に2隻の巨大な船が浮かんでいるのが見えた。特設給油空母である。

さらに近づくとさらに不思議な船で、タンカーの上に甲板を貼り付けて滑走路にしたような、そんな空母であった。飛行機を格納する場所はなく、この作戦のためだけに造られたような船である。

さらに不思議なことがあり、滑走路には前方にナチスのマークで

あるハーケンクロイツ（？）が描かれているのはわかるが、後方にはユダヤ人のマークであるはずの六芒星（ダビデの星）が記され、しかもその星の中心に、ハーケンクロイツが描かれているのだ。ヒトラーはユダヤ人を嫌っていたはずである。では、重要な作戦の特設空母に、しかも六芒星の中心にハーケンクロイツを記すとはいったいどういうつもりなのだろうか？

ユーリも、他のパイロット達もとてつもなく不思議がった。奇怪な形の空母に次々と戦闘機たちが降りて行き、給油をすませるとまた飛び立つ。

2隻の空母を低速で通り過ぎていく爆撃機達。みな、空母を不思議には思うが、今は作戦中なので無駄な会話はつつしんでいる。

後にわかることだが、この空母はユダヤ人資本家が、ユダヤ人を集め建造した船なのである。ナチスドイツの国家体制の中、迫害されていたユダヤ人達は、自らは決して劣った民族ではなく、しっかりとドイツに貢献できると証明するためにこの船を建造した。この作戦の後に、日本やイタリアといったドイツの同盟国から強い押しがあり、ヒトラーはユダヤ人にある程度の人権を与え、ユダヤ人はある程度の自由を獲得することに成功するのである。

2隻の空母上空を通り過ぎる頃、戦闘機編隊が戻ってきた。また、ユーリの爆撃隊を囲むように飛行する。

「こちら第31編隊、そちらは第72急降下爆撃隊で間違いはないか？」

「間違いありません。」

無線を入れる。

もうすぐイギリスである。おそらく、爆撃隊の第一陣はすでにロンドンに到着したことだろう。

そつと唇に指が行った。さきほどのキスが脳裏に鮮明に甦る。欧州文化に生まれながら、生活的に厳しい幼少期を送ってきたため、異性と唇を交わすなど初めての経験であった。矢野はキスをどうおもったのだろうか？少し気になった

どこか熱っぽい。顔が紅潮しているかもしれない…

だが、そんな感情も隣を飛ぶ護衛戦闘機を見た瞬間に吹っ飛んだ。ここは戦場だ。いつ死んでもおかしくない。

気を引き締めないと本当に死んでしまう。これから私達が行くのは敵の首都ロンドンである。

ユーリは軽く頬をたたいて気合を入れなおす。彼女が向かうのは戦場だ。

「編隊長、イギリスがみえましたぜ」

後ろに続く、部下の1人がふざけながら連絡を入れてくる。

「ちゃんと報告しろ」

「へいへい。編隊長殿、イギリスが見えてきました。」

部下の言うとおり、イギリスが見えてきた。崖の海岸線が見える。もうすぐ敵国本土か。

スツーカー隊は変わらぬ速度でイギリスへ向かった。そう、ロンドン死闘へと

空襲警報とともに、第8防空編隊の10機のスピットファイヤと20機のハリケーンが基地から発進していった。第9防空編隊であるキャットとリーはそれを見送った。

敵はもうロンドン近郊まで迫っている。だが、のろまな敵爆撃機や燃料切れ寸前の戦闘機ではロンドンの完全破壊は不可能であろう。飛び立っていく戦闘機たちをキャットとリーは見つめていた。

「来ましたね。我々の出番はあるでしょうか？」

「俺達の出番は、今、飛んでいった奴らが弾切れになって帰ってくるか、全滅したらだな。」

少し複雑そうにキャットは返答する。

「もしものこと考えて、準備しとくぞ。」

キヤットはリーをつれて第9防空編隊の更衣室へと向かう。途中、ほかの奴らも集め準備をさせる。

キヤットの考えでは、爆撃隊は無事撃墜され、我々の出番はないというものであった。実際、そういうことは多いのである。イギリス上空では圧倒的にこっちが有利である。いかに運動性に優れたメッサーシュミットであつても燃料を気にして自由に動けないならば、敵ではない。

準備を済ませた仲間達を見る。誰もが出撃準備完了であつた。外では味方が敵かが墜落したり、爆発したりする音がする。

数分間の後にあわてた司令官が入ってきた。

「第9防空編隊ただちに出撃。」

嫌な汗で服をびっしょりと濡らした司令官をみて

「第8防空隊はどうしたのですか？」

とキヤットが問うと。

「ほぼ、全滅した。ただちに出撃してくれ！」

そうして、リーの初陣が決まった。全員すごいスピードで滑走路に止まっている愛機に走る。敵はすでにロンドン上空に爆弾を落とす始めていた。

「第9防空隊、我に続け！」

キヤットが無線を送る。あわてふためき出撃。よたよた滑走路を走りなんとか離陸。

スピットファイヤ10機、ハリケーン30機が滑走路から緊急発進。

速度毎時402kmでロンドン上空まで急ぐ。

「ハリケーン機、戦闘機にかまうな。爆撃機を攻撃せよ！」

キヤットが無線で命令を出す。了解との連絡が入る。ロンドン上空、第8防空隊の飛行機は一機もない。本当に全滅したらしい。

今日のドイツ軍は何が違う？

ロンドン上空は敵機であふれ返っている。中央に爆撃機ハインケルHe111が数十機、周りを戦闘機が守っている。

キヤットはかまわず突っ込む。

戦闘機がキヤット機に群がってきた。メッサーシューミットの13mm機銃がキヤット機を撃つ。翼を反転させてうまくかわす。

戦争はいやだ、殺したくない。あれだけそう言ってきたキヤットだったが、いざ戦場に放り込まれると、まるで別人のようであった。

前方から敵機が1機やってきた。右に羽をずらしながら、敵の主翼を20mm機関砲で撃ち抜く。機関砲によって主翼が折れ曲がり、敵機は落ちていった。

今度は後ろから2機ほどくる。敵が後方から機銃で攻撃してくる。キヤットは急激に機体のピッチを上げ、風の抵抗とエアブレーキによって数秒間、急激な減速をおこなった。後ろについていた戦闘機2機はたちまちキヤット機の前に出てしまい、ピッチを戻したキヤット機の7.5mm機銃に掃射されて2機が撃墜された。

すり抜けるように、また立ちふさがったら撃ち落しながら爆撃機に迫る。

たしかにいつものドイツ軍と違う。とても戦闘に積極的である。

目の前に1機の爆撃機ハインケルが飛行している。機銃で撃ってきたが機体を軽く回転させながらハインケルに迫る。エンジンに機関砲をぶち込むとたちまち炎を上げて墜落を開始する。

後方からまた1機、戦闘機が迫ってきた。今度は機体を旋回させて相手の腹にもぐりこみ機関砲をお見舞いした。また落ちていく。

みるとまだまだ、周囲は敵だらけ。味方の機体はどこへいったのやら。

真上をハインケルが飛行している。死角にもぐりながら主翼に穴をあけて撃ち落とす。また炎を上げて落ちていった。

今度は後方から戦闘機が3機、キヤットは急降下していき3機を振り切る。そして急上昇し、3機の上から機銃を浴びせる。3機のうち2機が墜落、1機は煙を出しながら逃げていった。

前方にハリケーンが1機飛んでいた。

だれだろうか？リーだろうか？

後方からメッサーシュミットが近づいているのが見えた。ハリケーンは逃げようとするが速度的に無理があり、たちまち炎をまともてしまった。

キャットは少し青ざめた。だが、今は情を移している暇はない。前方に2機、ハインケルが飛んでいる。前方の旋回機銃で攻撃してくるのでうまくかわしながら接近し、またエンジンに機関砲をぶち込んだ。もう1機もまったく同じように落とす。

数十分間戦闘が継続された。キャットはその間に計15機のドイツ機を葬った。機銃、機関砲の弾が尽きたので飛行場に戻る。逃げたハインケルも多い、爆弾もかなり落とされた。ロンドンはいたるところで火災が発生している。

すると、ハリケーンが1機、飛行場に戻ってきた。スライドコックピットの窓を開けると、リーがキャットに手を振る。

「キャットさん無事でしたかー」
キャットは少しだけ安心した。帰還したのはリー、キャット合わせて4機。

整備兵は機関砲や機関銃に弾をこめる。

「キャット！爆撃機の大編隊が接近中だ！」

司令官が大慌てで電報をみせる。

「また？」

愛機を休ませることはできなさそうだ。4機の第9防空編隊が出動する。

ロンドン上空では第10、11防空編隊が奮闘していた。

また、ハインケルのようだ。それと、さらに高高度にユンカーズju88が飛んでいる。大編隊。とてもすべてを落とすのは不可能だ。

目の前では、ハリケーン機がハエのように落ちていつていた。

いや、敵も味方もない。劣勢も優勢もなくなった空の乱戦。味方も敵もまるでゴミのように落ちていく。あるものは爆散し、あるものはロンドンに墜落した。

「爆撃機を優先せよ」

キヤットはまた同じ命令を下す。了解の言葉がちらほら返ってきた。キヤット機がスロットを下げて、速力を上げる。メッサーシュミットが数機襲ってきたが、上手にかわして爆撃機へと接近する。

ハインケルの旋回機銃が撃つてくる。主翼を上下に揺らして、なにかかわすと、間近に迫ったハインケルに射撃する。

葉莢ハヤヒが空に飛び散る。数十発の機銃弾がハインケルに穴を空け、テラスのように張り出した機首のガラスを粉々にしていく。しばらくして、ハインケルは落ちていった。

後ろから数機のメッサーシュミットが追ってくる。だが、キヤットは見向きもしないで、次の爆撃機へと向かった……

愛機、ホーカーハリケーンの後ろには2機のメッサーシュミットが迫っている。中国系アメリカ人、リーの機体である。

キヤットの命令どおり、戦闘機にはかまっていられない。爆撃機をすばやく見つけ、攻撃する。敵のメッサーシュミットはキヤットや他の司令官が言っていたのよだいぶ違う。燃料を気にしているとは思えないほど、積極的に戦闘を挑んでくる。

リーはありったけスロットルを開いて急上昇する。メッサーシュミットを引き離すという意味合いと、高高度を飛行するユンカーズJ u 8 8を撃墜するためでもある。ハリケーンの最大速度は優れてはいないが、急上昇が加わったことよって少しの時間、敵機を引き離すことができた。その少しの時間を使い、ユンカーズに攻撃する。

ユンカーズはあらゆるところから旋回機銃を撃ってくる。なんとかかわしながら接近し、20 m機関砲4門から一斉に弾を発射する。強力な砲弾がユンカーズの主翼にあるエンジンを貫いた。プロペラが無残にも飛んでいく。エンジンを失ったユンカーズは落ちる

しかなかった。

そこへ先程のメッサーシューミットがリーをめがけて攻撃してくる。数は2機。旋回戦になれば間違いなく負ける。どうにか、重武装を活かせる戦場をつくらなければいけない。

リーは今度は急降下を開始する。敵機もそれに続く。

後方から機銃弾の雨が降り注ぐ。副翼に数発あたったかもしれない。それでも急降下をやめない。羽が風を受けて透通った音を上げる。

敵機はリーの後方をぴったりとくつついてきた。副翼が悲鳴を上げ始める。

充分降下した。そう思ったとき、ついに機体のピッチを上げた。敵機は驚き、続いてピッチを上げてくる。が、しかし、リーはスロットルを下げ、急激な減速を行った。対応しきれない敵機はそのままリー機の前に出てしまい、リーの機関砲に貫かれ、みごとに粉碎されてしまった。

目の前で敵機が粉々になる。搭乗員は見えない。

機体をまげて、炎上する敵機残骸を通り抜けていく。

ロンドン上空で3機の戦闘機と4機の爆撃機をリーは落とす。外界の空気に触れて、ギシギシと音が立てる主翼をいたわり、一度飛行場に降りることにする。数機の戦闘機が迫っていたが、後方にいた味方機のおかげでなんとか離脱できた。弾もほとんど入っていない。

初めての实战。訓練や演習などとは比べ物にならないほどリーは緊張していた。操縦桿を握る手は細かく振動し、嫌な汗で濡れ、あまりにも大きく心音が伝わってくる。

敵機が見えるだけで恐怖が増大し、落ちていく味方機を見るとさらに恐怖が吹き上がってくる。命と命がこの空では消えたり消したりしあっている。

飛行場が見えてきた。引き込み式脚を出し、滑走路に着陸する。

「おい、どうしたー」

整備兵たちが走りよってくる。

「弾が切れた、あと機が少し被弾してる。」

リーの返答を聞く整備兵たち。リーの機体は後方副翼に無数の穴が開いている。また、エンジン下部にも少しの被弾の後があり飛び立てば、空中分解する可能性がある。

「だが、基地には代えのハリケーンはねえぜ。」

整備兵がリーに告げる。リーは一瞬だけ不快な顔を顔をしたが、すぐに微笑を取り戻す。

「わかった。この機はまだ飛べます。応急処置してください、あと弾もお願ひします。」

リーはそう告げると一度機から降りた。

ロンドン上空を見上げると圧倒的な数の爆撃機がロンドン上空を蹂躪している。

その下部から落とされる爆弾はロンドンを燃やす。

キャットさんはあの中だろうか・・・

敵との乱戦が繰り広げられる中、まだまだイギリスの抵抗はやんではいなかった。

3・巨人の渡河作戦1（後書き）

どうもついに3話目ですね^^

今回はベタなキスシーンが「爆

今回、敢行された巨人の渡河作戦。これは私のオリジナルです。というか、これ以後、現実にあつたことなんてめつたに出ません。戦況や作戦的な意味で・・・。

ただ、共通していることと言えば、戦争によってあまりにも多すぎる人が死に、精神を疲弊させたことは現実でも、この物語でも同じだろうと思います。

コメント、感想、評価、心よりお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8833i/>

ぼくらはたしかに空にいた

2010年10月11日04時21分発行